



ペンテコステ

2017年7月1日発行
(毎月1日発行)

谷山カトリック教会

891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738

E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: <http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/>

発行人: 頭島 光 神父 編集委員: 太田勇二郎 Sr.下川千穂子 岸誠之助

私たちが暮らす家は、今！

◆ 「待ったなし！」

前回のペンテコステでは、傷つけられた環境に、或いは人に「ケアする」姿勢をもって自分のほうから積極的に優しさ、そして愛を提供することの大切さを話しました。言い換えれば「率先して出向く人となる」ことです。それでは「なぜ我々はそのような行動を起こすか」を考えてみたいと思います。人はよく「今は、他人のために何もできない」「自分のことだけで精一杯なのに」「その時が来ればいずれします」などと言います。そうではなく、今こそ行動に移すときなのです。なぜなら私たちを取り巻く環境破壊はまさに「待ったなし！」の緊急事態だからです。

◆ 気候という財産 (LS.No.23-25 参照)

私たちの住むこの地球の温暖化については、これまでもよく話題に上りますが、実はもう既に様々な危機の中にあります。温暖化は多くの人々の暮らしを破壊し、ついには難民問題にまで発展しているからです。その影響を真っ先に受けるのはいつも貧しい人々です。日本に暮らす私たちにはそれほど大きな脅威ではありません。せいぜいそれによる気候変動か、異常気象です。元はと言えば、いわゆる産業革命がこれら環境破壊をもたらしました。それから凡そ2百年経って人類はようやく環境は大切なものであり、エコロジカルに共有すべき財産だと分かるようになったのです。

◆ すべて良いもの (LS.No.65 参照)

神はすべての被造物と人とを造り終えられ、次のように言われました。「見よ、それは極めて良かつ

た」(創1:31 参照)と。特に人はその中でも最も優れた存在として造られました。つまり、人はもはや単なる物や何かの陰のようなものでなく、人格という自立した顔を持つ神の似姿なのです。それゆえ、人は自身を知り、所有し、かつその命の尊厳を理解し、他の人と交わることができる存在なのです。しかし、神によって愛され、望まれ、必要とされた人間は、やがて創造の主である神を忘れていくのです。

◆ 秩序の破壊 (LS.No.66-68 参照)

人の特性とは、他者と交わりを持ち関わるということです。その通り、人はまず自然と関わり、そこで神を信じ、愛を知って相互の生活を営む社会を構築してきました。ところが、それら関りをすべて断絶させる事態が内部から始まるのです。これこそが罪であり、神と人間との秩序を破壊したのです。罪は心の中に潜む悪の権化です。罪は神との交わりを拒絶し、人に自然との調和と限界を認めることを止めさせます。こうして人は大地を耕し、命を守るといふ自然と神への大原則を壊し、戦争、暴力、虐待というあらゆる悪徳の業に魂を売ってしまいました。「主は命じられ、すべてのものは創造された」(詩148:5)とあるように被造物はすべて神によって生かされています。誰一人、何一つ神と関わりのないものが存在しません。森の木々や小枝、小さな虫たちでさえ、奪われ、壊されたりしてはなりません。すべての被造物に心留められる人でありますように。

主任司祭 頭島 光 神父

今月の聖人から

スウェーデンの 聖ブリジッタ修道女

聖ブリジッタは、スウェーデンのマグヌス2世の王妃の女官であった。その頃の宮廷生活は華美で軽薄であったが、ブリジッタは遠慮なく指摘していた。その感化を受けてマグヌス王は自分の生活を改善したといわれる。ブリジッタが宮廷から退いた後に夫を亡くしたが、その時から4年間シトー会修道院で厳しい生活を送り、程なくヴァズテナに修道会を創立した。この時、マグヌス王は彼女に多大な寄付をして助けている。

1390年にブリジッタはローマへ移って不幸な人々を助けたり、スウェーデンの留学生や巡礼者のための宿泊所を設けたりした。ウルバノ5世教皇もヴァズテナの修道院を支援し、彼女が教皇の短所と思ったことを正直に告げていたにも拘わらず、多額の補助金を与えた。

死後、1391年に聖人の位に挙げられた。



Taniyama CC NEWS

★ 5月21日 大口教会で北薩大会があり、そこで行われた堅信式では、谷山教会の4名の方々が秘跡を受け

られました。以下は、満吉敬太さんと田原果朋さんの感想文です。

≪聖書から始まり - 高校2年の時に、はじめて兄の持っていた聖書を読んでから四十歳になって洗礼・堅信の秘跡にあずからせていただくこととなった。その間、サンスクリット語を勉強したり、プロテスタントの教会に通ったりといろいろな事があった。カトリックに出逢えたのは、聖霊の働きとしかいいようがない。聖書の勉強を始めてから現在、宗教と社会の関心にもつようになったが、神の力の前ではおろかな事だったかもしれない。まだ

★ 6月11日 は三位一体の主日(祭日)でした。そのミサ中で聖アルフォンソ合唱団の本年度第1回のミサ曲奉獻が行われました。司式はドン・ボスコ神父様で、曲目はモーツァルト作曲の「雀のミサ」でした。次回は10月8日(年間第27主日)、大分のカテドラルに決まりました。



★ 6月18日(15:00)東京オペラ協会(総監督:石多エドワード)のオペラ「高山右近-至福の王者、剣か愛か」が上演されました: 福者に列福された我らの高山右近の半生記。聖ア合唱団の有志も特別参加。

何も知らない新参者だが、一步一步たしかな歩みをすすめていきたい。≫ ≪最初は、私が描くイラストの取材のために教会へ向かいました。最初は信者になろうなんて思っておらず、あくまでも取材のうちに留めておこうと思っていました。しかしこれは、もう既に神に導かれていたのです。何度も教会に通い、神に愛されている信徒の方々に私も愛され、ついに私は神への愛の道にいきることに委ねました。私は多くの方々に愛され、また神にも愛され幸せだと感じています。私もこれから多くの人々を愛し、神の道へ進んでゆきたいと決意しています。≫





ムイベルガ神父のアンテナ

ルーテルと聖マリア

中学生になった時、プロテスタント教会の学生から、よく次の批判を聞きました。「カトリック教会の信者たちはイエス・キリストより聖マリアを礼拝していると聞きましたか・・・」 それに対して、私たちはかれらに反論しました。「あなた方のルーテルはイエズスの母を軽蔑して、そのうえに教会の一致を壊しました」と。しかし、不公平にならないように、マルチン・ルーテルが実際にはイエズスのお母さんをどう見ていたのかという質問が必要になります。

中世末期には、マリアへの崇拜が非常に盛んになりました。芸術家は高価なマリアの御像を作り、多くの教会や大聖堂がマリアに奉獻されました。信者たちはそのマリアに捧げられた巡礼教会を訪れました。昔に歌われた“レジナチェリ”は現代でもよく知られています。またロザリオの祈りはあの時代の霊的な遺産です。

このマリアへの熱心な崇拜を熟考してみますと、信者たちがマリアに特別な役割を与えていたとしても不思議ではありません。勿論、マリアはイエズスの母です。

しかし一般の信者にとっては、神と人間との仲介

者であるイエス・キリスト、そのイエス・キリストとの仲介者がマリアなのです。

ルーテルはこの時代のイエズスを、最後の審判の時の厳しい裁判官として見ています。それ故、一般の信者たちは創造によって、マリアが信者たちの守護者や助け主や弁護者になるように仕立てたのでした。この考察はルーテルの経験と大体一致しており、そして彼のマリアに対する見方になりました。さらにもう一つの特徴が彼にはあって、恐怖心や物怖じする心もまた彼の敬虔からくる特徴でした。マリアは彼の心を理解する保護者でした。

ルーテルは聖書(ローマ人からの手紙)の勉強によってイエス・キリストとマリアの新しい姿を発見したのです。イエス・キリストは憐れみのある救い主であり、マリアはイエズスに協力する母であったと。もしこの現代で「マリアを尊敬するかどうか」と彼に尋ねる機会があれば、ルーテルからはどういう返事がもらえるでしょうか。恐らく「マリアはイエズスの母です。同時に私たちの優しい母です。この母は恐怖を起こすことなく、成果も求めません。」



★ 6月25日 初聖体式

年間第12主日のミサ中で穢れを知らぬ8人の幼子が初聖体を受けました。4月から始まったそのための勉強も8回を数え、最後には「ゆるしの秘跡」を受けて、この日に臨みました。それぞれ立派な信者に成長し、私たちを支えてくれることを信じます。

彼らにはまずミサのお手伝いをお願いすることに

なるでしょう。可愛い・・・楽しみです。



岸 和菜佳	平井 健二郎	平井 圭乃	河野 颯馬	田辺 千智	上村 舟人	上村 虎太郎	上村 花実
ローザ・マリア	パウロ	マリア	ペトロ	パウロ	ミカエル	A・フランシスコ	クララ
小1	小2	小1	小5	小4	小6	小3	5歳